

ローマはビジョンを確立する - 第一

私的解釈

Jeff Pippenger

2024-06-28

また、そのころには多くの者が南の王に逆らって立ち上がる。さらに、あなたの民の略奪者たちも、幻を成就させようとして高ぶる。しかし、彼らは倒れる。ダニエル 11:14.

キリスト教の文脈における「教義」という語は、聖書に基づき確立された真理を意味する。キリスト教を標榜するさまざまな団体は、それぞれが聖書の教義と見なす体系は異なっているが、真理はただ一つである。「絶対的真理」と「多元主義」の区別については、この段階では検討の対象外である。

そこでピラトは彼に言った。「それでは、あなたは王なのか。」イエスは答えた。「あなたが言うとおり、私は王である。私はこのために生まれ、このために世に来た。すなわち、真理について証しするためである。真理に属する者はみな、私の声を聞く。」ピラトは彼に言った。「真理とは何か。」彼はこう言うと、ふたたびユダヤ人たちのところへ出て行き、彼らに言った。「私はこの人に何の罪も見いださない。」ヨハネの福音書 18:37-38

真理は神の御言葉であり、神の御声であり、キリストご自身である。

私たちは、キリスト教の本質は何か、何が真理であるのか、私たちが受け継いだ信仰とは何か、そして聖書の規範—すなわち最高の権威から私たちに与えられた規範—とは何かを、自ら知っていなければならない。信仰の拠り所となる理由も、その事柄が真実であることを示す十分な証拠もないままに信じる人が多くいる。自分の先入観と調和する考えが示されると、彼らはたちまちそれを受け入れてしまう。原因から結果へと論理的に考えず、彼らの信仰には真の土台がないため、試練の時には、自分が砂の上に建てていたのだと知ることになる。

自分の現在の不完全な聖書知識で満足し、それで救いに足りると思って安住している者は、致命的な欺きのうちに安住しているのである。誤りを見分け、真理として押しつけられてきたあらゆる伝承や迷信を断罪するための聖書的論拠を、十分に備えていない者が多くいる。サタンは、キリストの福音の単純さを墮落させようとして、神への礼拝の中に自分の考えを持ち込んだ。現在の真理を信じると称する多くの者は、かつて聖徒たちに授けられた信仰—「あなたがたのうちにおられるキリスト、栄光の望み」—を何が成り立たせているのかを知らない。彼らは古き標識を擁護していると思っているが、実は生ぬるく無関心である。自らの経験に織り込み、実際に備えるべき愛と信仰という真の徳が何であるかを知らない。彼らは綿密な聖書の学徒ではなく、怠惰で不注意である。聖書の箇所をめぐって意見の相違が生じると、目的をもって学ばず、自分が何を信じるかを定めていないこれらの者は、真理から離れ去ってしまう。私たちは、神の真理を熱心に探究する必要があることをすべての人に強く刻みつけ、彼らが何が真理であるかを、確かに知っているのだと自覚できるようにすべきであ

る。多くの知識を持つと主張し、自分の状態に満足している者もいるが、彼らには、まるで神を一度も知らなかったかのように、働きに対する熱意も、神に対する、そしてキリストがそのために死なれた魂たちに対する熱烈な愛も、少しも増し加わっていない。彼らは、自分の魂にその髄と豊かさを取り入れる[ために]、聖書を読むのではない。それが自分に語りかける神の御声であるとは感じていない。しかし、もし救いの道を理解し、義の太陽の光線を見ることを願うなら、私たちは目的をもって聖書を学ばなければならない。というのも、聖書の約束と預言は、贖いの神の御計画の上に澄んだ栄光の光を投じており、この壮大な真理は明確には理解されていないからである。『1888年資料』403頁。

私たちは、それらの教義が何であるか、また、それらの真理をどのように提示し、立証し、擁護するかを知っていなければならない。

今の私たちには、だれかが孤立して一人で立たされることなど起こりそうに思えませんが、もし神がかつて私を通して語られたことがあるのなら、私たちはその御名のために評議会の前に、また数千人の前に引き出される時が来て、一人ひとりが自らの信仰の理由を弁明しなければならなくなるのです。そのとき、真理のために取ってきたあらゆる立場に対して、最も厳しい批判が加えられるでしょう。ゆえに、私たちが主張する教理をなぜ信じるのかを知るために、神の御言葉を学ばなければなりません。私たちは、主の生ける御言葉を批判的に吟味しなければなりません。レビュー・アンド・ヘラルド誌、1888年12月18日。

「『数千人』の前に引き出されるには、終末の時代の真理の擁護者の中には、テレビやウェブ放送のような媒体で真理を弁護せざるを得なくなる者がいるのは明らかである。さもなければ、十四万四千人が語る証しを数千人がどのように見ることができるのか。私たちが唱える教義は、私たちの信仰の土台を明らかにする。」

「教会員は一人ひとりが試され、その真価を問われるだろう。彼らは、真理のために証言することを余儀なくされるような状況に置かれるだろう。多くの者が評議会や法廷の前で、あるいは別々に、独りで語るよう召されるかもしれない。この非常時に彼らの助けとなったはずの経験を身につけることを怠ってきたため、彼らの魂は、無駄にした機会と顧みなかった特権への悔恨で重くのしかかっている。」 Testimonies, 第5巻, 463.

神の御言葉は決して失敗しません。したがって、私たちが十四万四千人の一人に数えられるためには、神の御言葉に書かれていることに基づいて、何を信じるべきかを知っていなければなりません。神の民が自分たちの信じる教理を説明せざるを得ない試練の時が来る前に、神は、神の民が御言葉を吟味して学ぶようにするために、誤りが持ち込まれることをお許しになります。

神の民の間に論争や動揺がないという事実を、彼らが健全な教理を堅持していることの決定的な証拠と見なすべきではない。彼らが真理と誤りを明確に識別していないのではないかと恐れる理由がある。聖書の探究によって新たな問いが生じず、真理を持っていることを確かめるために人々を自ら聖書を調べることへと駆り立てるような意見の相違も起こらないときには、昔と同様、今も多くの者が伝統に固執し、何を礼拝しているのかも知らないまま礼拝するだろう。

私に示されたのは、現在の真理を知っていると公言する多くの人々が、自分が何を信じているのかを知らないということだ。彼らは自らの信仰の根拠を理解しておらず、今この時のための働きの真価を正しくわきまえていない。試練の時が来るとき、今は他者に説教している者たちでさえ、自分たちの立場を吟味してみれば、満足のいく理由を示せない事柄が多くあることに気づくだろう。このようにして試されるまで、彼らは自らの大いなる無知を知らなかった。また、教会の中には、自分は信じていることを理解しているのだと当然のように思い込んでいる者が多いが、論争が起こるまでは、自分の弱さを知らない。同じ信仰を持つ者から引き離され、ただ一人で自分の信仰を説明することを余儀なくされたとき、彼らは、自分が真理として受け入れてきたものについての考えがいかに混乱しているかを知って驚くだろう。確かに私たちの間には、生ける神から離れ、人に頼り、神の知恵の代わりに人間の知恵を据えるという背離が起こってきた。

神はご自分の民を目覚めさせられる。ほかの手段が功を奏さないなら、異端が彼らの間に入り込み、それが彼らをふるいにかけて、もみ殻と麦とを選り分けるだろう。主は、ご自分の御言葉を信じるすべての者に、眠りから目を覚ますよう呼びかけておられる。今この時にふさわしい尊い光が与えられている。それは、私たちの目前に迫っている危険を示す聖書の真理である。この光は、聖書を熱心に研究し、私たちが取っている立場を最も厳密に吟味することへと私たちを導くべきである。神は、祈りと断食をもって、真理のあらゆる側面と立場を、徹底して忍耐強く探求することを望んでおられる。信じる者たちは、真理とは何かに関する憶測や漠然とした考えに安住してはならない。彼らの信仰は、試練の時が来て、その信仰について答えるために評議会の前に引き出されるとき、彼らの内にある希望について、柔和と畏れをもって理由を述べることができるよう、神の御言葉の上に堅く据えられていなければならない。

働きかけ、働きかけ、働きかけよ。私たちが世に示す主題は、私たち自身にとって生きた現実でなければならない。私たちが信仰の根本教義と見なす教理を擁護するにあたっては、完全に健全と言えないような議論を決して用いてはならない。そうした議論は反対者の口を封じることはできるかもしれないが、真理を尊ぶものではない。私たちは、反対者を黙らせるだけでなく、最も厳密で徹底した吟味にも耐える健全な論証を提示すべきである。論争家として身を磨いてきた者には、神の言葉を公正に扱わなくなる大きな危険がある。反対者に対するとき、単に信者に確信を与えることを求めるのではなく、その人の心に確信を呼び覚ますような仕方主題を提示することこそ、私たちの真剣な努力であるべきだ。

「人間がどれほど知的に進歩しようとも、より大いなる光を得るために聖書を徹底的かつ継続的に探求する必要がないなどと、片時たりとも考えてはならない。私たちは民として、一人ひとりが預言の学徒となるよう召されている。神が私たちにお与えになるいかなる一条の光も見分けられるよう、熱心に見張っていなければならない。私たちは真理の最初のかすかなきらめきを捉えなければならない。祈りつつ学ぶことによって、さらに明確な光が与えられ、それを他の人々の前に示すことができる。」『証言』第5巻、708頁。

最終的に十四万四千人を構成する「預言の研究者たち」は、間もなく到来する日曜法をめぐる危機と迫害をもたらす地上の権力と対峙する前に、「個々に試され、証明される

」ことになる。忠実な者たちはまず神によって「目覚めさせられる」。眠っている乙女たちは、遅延の時に陥った眠りから「目覚めさせられる」。2023年7月以降に発信されてきた記事を通して神が示されたメッセージによっても彼らが目覚めないなら、神は「異端」が「彼らの間に入り込む」ことをお許しになり、それによって、ふるい分けの過程を通して麦と毒麦の分離が最終的に成し遂げられる。私たちは今、そのふるい分けの過程のただ中にいる。

「現代のローマ」の正しい同定をめぐる論争を追ってきた人々には、三つの選択肢がある。ひとつは、合衆国が現代のローマであるという立場、もうひとつは、教皇権が現代のローマであるという立場、そして三つ目は、前の二つはいずれも誤りであり、別の何らかの勢力が、ダニエル書十一章十四節において自らを高め、倒れ、そして幻を確立する「ダニエルの民の略奪者」によって表されているという立場である。

私は、現代ローマが教皇権なのかアメリカ合衆国なのかという不一致が、この運動に持ち込まれることを神が許されたのは、神の民に神の預言の言葉を研究するよう強いるためであると主張する。神はご自身のあわれみの現れとして、この論争をもたらされた。私は、この不一致は、現代ローマについて誰が正しく誰が誤っているかを単に見極めることよりも、来るべき危機に備えるよう神の民を準備させることに、より関わっていると主張する。この不一致は、見ようと望むすべての人に、自分自身の神の預言の言葉に対する理解が不完全であるか誤っていることを示すために、神によって許され、意図されたものである。ゆえに、この論争は神のあわれみの証拠である。

この論争は、「あなたの民の略奪者」によって表されている勢力がどの勢力を指しているのかの特定に関わるだけでなく、論争の双方が堅持していると公言する「行に行を重ねる」方法論が正しく適用されているかどうかにも関わっている。「行に行を重ねる」方法論に関連する預言的規則には、麦と毒麦をふるい分ける過程の一部となる特別な預言原則が含まれている。現在のこの論争において私が誤解されていると主張する「行に行を重ねる」方法論の三つの要素は、真理としてのキリスト、アルファでありオメガであるキリスト、そして預言の三重適用である。

結局のところ、ダニエル書11章14節を誤って理解している人々は、自分たちの教理上の立場が私的解釈に基づいていることが明らかになるだろう。

また、私たちは、さらに確かな預言のことばを持っています。暗い所で輝くともしびに目を注ぐように、それに注意を払うのは、あなたがたにとって良いことです。やがて日が明け、明けの明星があなたがたの心に昇るその時まで。まず第一に知っておくべきことは、聖書のどの預言も私的な解釈に基づくものではないということです。というのも、預言は昔、人間の意志によってもたらされたのではなく、神の聖なる人々が、聖霊に動かされて語ったからです。第二ペテロ 1:19-21

第十四節をめぐる論争において、私が「私的解釈」と理解するものの一例は『The Great Controversy』に見られる。

安息日がキリスト教界全体における特別な論争点となり、宗教的権威と世俗の権力が結託して日曜日の遵守を強制するようになると、大衆の要求に屈することを頑として拒む少数者は、広く憎悪と非難的となるだろう。教会の制度と国家の法律に反対し

て立つ一握りの者は容認されるべきではない、諸国全体が混乱と無法に陥るよりも彼らが苦しむほうがよいのだ、と主張されるだろう。同じ論法が、はるか昔に「民の指導者たち」によってキリストに対して持ち出された。「一人の人が民のために死に、国全体が減びないほうが、われわれにとっては得策である」と、狡猾なカヤパは言った。ヨハネ 11:50. この論法は決定的なものに見えるだろう。そしてついには、十戒第四条の安息日を聖として守る者たちに対する布告が出され、彼らは最も厳しい罰に値するとして非難され、一定の時間が過ぎたのちには、彼らを殺すことを民に許すものとなる。旧世界のローマ主義と新世界の背教的プロテスタンティズムは、神のすべての戒めを敬う者たちに対して同様の方策をとるだろう。『大論争』615.

「キリスト教圏」は、世界中のキリスト者の共同体、あるいはキリスト教が多数派である国々や文化の集合体を指す。この語は、キリスト教が支配的な宗教であり、文化、法律、社会規範に大きな影響を及ぼしてきた世界の地域を指すのにしばしば用いられる。キリスト教圏は、その信徒、文化的影響、歴史的意義という観点から、キリスト教の地球規模の広がりを含むしている。エレン・ホワイトのCD-ROMにある重複を取り除かずに数えると、「キリスト教圏」という語は176回出現する。地理的には、シスター・ホワイトは、一般にキリスト教圏はヨーロッパとアメリカ大陸を指すと述べている。シスター・ホワイトの文脈では、ヨーロッパは旧世界、アメリカ大陸は新世界とされる。

しかし、子羊のような角を持つ獣は「地から上ってくる」のが見られた。自らを打ち立てるために他の権力を打倒するのではなく、このように象徴される国家は、これまで占有されていなかった地域において興り、徐々に、しかも平和裏に成長しなければならない。したがって、それはひしめき合い争い合う旧世界の諸民族-すなわち「民と群衆と国民と言語」という騒然たる海-のただ中に興ることはできなかった。それは西方の大陸に求められなければならない。

「1798年、新世界で勢力を伸ばし、将来の強さと偉大さを予感させ、世界の注目を集めていたのはどの国であったか。象徴の適用については疑いの余地がない。この預言の記述に合致するのは、一つの国、ただ一つだけである。それはまぎれもなくアメリカ合衆国を指し示している。」『大争闘』441頁

私たちが検討している段落の最後の文は、「旧世界のローマ主義と新世界の背教的プロテスタンティズム」という句が、『旧世界のローマ主義』を暗黒時代の教皇制とし、また『新世界の背教的プロテスタンティズム』という表現で示されるアメリカ合衆国（背教的プロテスタンティズム）を現代のローマと同定している、と示唆するために用いられてきた。「旧」は過去の歴史、「新」は近代または現代の歴史と定義される。このような適用は、キリスト教世界と旧世界・新世界の双方に関するホワイト姉妹の確立された理解をねじ曲げるものである。

その文を過去と未来の歴史という観点で適用するやり方は、シスター・ホワイトの意図した意味に真っ向から反する「私的解釈」となる。主張は、「旧世界」は過去の歴史を表し、「New」は近代または現代の歴史 (New) を表す、というものである。

その箇所は「will pursue」と述べている。ローマ主義と背教的プロテスタントは「すべての神の戒めを尊ぶ者たちに対して、同様の道をたどるだろう」。その箇所という旧世界

はヨーロッパ、新世界はアメリカ大陸である。シスター・ホワイトは、全世界が日曜法の試練に直面し、ヨーロッパではローマ主義が迫害を先導し、アメリカ大陸では背教的プロテスタントが迫害を先導する、と教えている。アメリカ大陸とヨーロッパが「キリスト教世界」と定義されている。ローマ主義と背教的プロテスタントは、すべての神の戒めを尊ぶ者たちに対して「同様の道をたどるだろう」。

「Will pursue」は両勢力による将来の行為を示しており、旧世界のローマ主義が暗黒時代の教皇権力であると示唆することは文法的に不可能である。両勢力によって行われる迫害は未来形で語られている。その語句の定義は「will pursue」であり、それは何かを達成または獲得する意図をもってそれを追い求めることを意味する。それは、個人または集団が目標や目的を積極的に追求することにコミットしている将来の行為を含意する。

この表現はさまざまな文脈で用いられる。「She will pursue a career in medicine」は、彼女が医療分野でのキャリアを築くつもりであり、医療専門職になることを目指して取り組むという意味である。「He will pursue a degree in engineering」は、彼が高等教育機関で工学を学ぶ意向であることを示している。「The team will pursue the project until completion」は、チームがプロジェクトが完了するまで取り組みを続けることを示唆している。「They will pursue legal action against the company」は、不満の解消や正義の実現のために、彼らがその会社に対して法的手段を講じる意図があるという意味である。総じて、「will pursue」は、将来に特定の目標や成果を達成しようとする決意、コミットメント、そして明確な意図を示す。

旧世界のローマ主義は過去の歴史だと教えるために用いられる私的解釈は、その後、預言の三重適用の誤った適用を支える論拠として用いられる。それは、ローマの三重適用が、異教ローマ、次いで教皇ローマ、そして三つのローマの第三としてアメリカ合衆国を表すのだと主張する。2001年9月11日の直後にも、ヨエル書をめぐって一つのグループが運動から分離した際、非常に似た誤った適用が用いられた。

その後、論争はカナダでのキャンプ集会で始まった。そこで、三つの災いの三重適用がヨエル書に組み込まれ、第一章六節でその地に攻め上って来る国は第三の災いのイスラムであると教えるために用いられた。その国は教皇ローマであるにもかかわらず、それをイスラムだとする私的解釈が持ち込まれた。三つの災いの三重適用は、2001年9月11日の勢力としてイスラムを位置づけており、新たな私的解釈は、ヨエル書第一章の教皇権は実はイスラムだと主張した。ヨエル書における教皇権の正しい特定を退ける私的解釈は、三つの災いの誤った適用によって支えられた。今や、教皇権を退けてアメリカ合衆国を当てはめる私的解釈が持ち込まれつつある。

かつてあったことは、これからもあることであり、すでに行われたことは、これからも行われることである。日の下に新しいものは何もない。「見よ、これは新しい」と言えるものがあるだろうか。それは私たちの前に、昔からすでにあったのだ。伝道者の書 1:9、10。

終わりの時の論争には古い論争の繰り返しが含まれており、ダニエル書11章には、ユライア・スミスが「北の王」という象徴に私的解釈を当てはめたことをめぐる論争がある。こうして彼は、暗闇しか生み出さないダニエル書11章の理解を作り出した。この終わりの

時に繰り返されている論争は、とりわけ、確立された真理に私的解釈を適用することの実を明らかにしている。これはスミスが自著『ダニエル書と黙示録』で行ったことにほかならない。これはヨエル書をめぐる論争でもなされたことであり、また、『各時代の争闘』の一つの段落だけを持ち出し、「キリスト教界 (Christendom)」が何を表すかについて世間一般およびエレン・ホワイトの著作に見られる定義を避けるとともに、「will pursue」という語句が将来の出来事を示すとする文法の基本規則を退けるときに用いられているのと同じ力学である。その観点から、「旧世界」とは538年から1798年までの教皇権の歴史だとする誤った概念が持ち出され、預言の三重適用という定義に関する確立された理解に反論するために用いられるのである。

神が預言史において過去に成就すべきものとして定められたことはすべて、すでに成就した。さらに、なお順序に従ってこれから起こるべきことも、ことごとく成就するであろう。神の預言者ダニエルはその持ち場に立っている。ヨハネもその持ち場に立っている。黙示録において、ユダの部族の獅子は、預言を学ぶ者たちにダニエル書を開いた。こうしてダニエルはその持ち場に立っているのである。彼は、私たちがその成就のまさに目前に立っているときに知っておかねばならない、重大にして厳粛な出来事について、主が幻のうちに彼に啓示されたことを証言している。

歴史と預言において、神の御言葉は真理と誤りの長く続く闘いを描いている。その闘いは今なお進行中である。かつてあったことは、繰り返される。古い論争は再燃し、新しい理論が絶えず起こるだろう。だが、第一・第二・第三天使のメッセージの宣言において、信仰においても預言の成就においても一役を担ってきた神の民は、自分たちの立場を知っている。彼らは純金にもまさる尊い経験を持っている。彼らは岩のように堅く立ち、初めの確信を終わりまで堅く保たなければならない。『選ばれたメッセージ』第2巻、109頁。

ホワイト夫人は、パウロの言う『彼らの確信の初め』をアドベンチズムの基礎的諸真理として特定していることは、容易に示すことができる。ミラー派は、『あなたの民の略奪者』は教皇権であると教え、1989年以降、十四万四千人の運動もミラー派と同様に、その象徴について同じ理解を繰り返し確認してきた。ところが今や、『あなたの民の略奪者』が誰であるかについての「新しい理論」が現れ、確立された預言上の象徴を誤って同定し、砂の上に築かれた預言モデルを構築することによって、古い論争を蒸し返している。それがスミスの私的解釈であれ、ヨエル書1章における「国民」の誤った適用であれ、あるいはアメリカ合衆国を現代のローマと同定することであれ、これら三つの誤謬はいずれも終末における教皇ローマの正しい理解を攻撃し、そのことによって、神の民が滅ぶのか生きるのかを見分ける預言的異象を確立する象徴を攻撃している。

将来、ヨーロッパにおけるローマ・カトリック主義とアメリカ大陸における背教的プロテスタント主義は、聖史を通じてなされてきたように、安息日遵守者への迫害を「推し進める」だろう。

神はご自分の民を目覚めさせられる。ほかの手段が功を奏さないなら、異端が彼らの中に入り込み、それが彼らをふるいにかけ、もみ殻を麦から分けるだろう。主は、ご自身のみことばを信じるすべての者に、眠りから目を覚ますよう呼びかけておられる。この時にふさわしい尊い光が与えられている。それは、まさに私たちの目前にある危

陰を示す、聖書の真理である。この光は、私たちを聖書の熱心な研究へ、そして自分たちが保持している立場を最も厳密に吟味することへと導くべきである。神は、祈りと断食をもって、真理のあらゆる関連と立場を、徹底して、忍耐強く探求することを望んでおられる。信仰者は、真理を成すものについての推測や曖昧な観念に安住してはならない。Gospel Workers, 299.

これらの考察は次回の記事で続けます。